

児童期・青年期における多面的動機づけの発達と学校適応過程

大阪大学大学院人間科学研究科 中谷素之

The Development of Children's Multiple Goals and School Adjustment

Graduate School of Human Sciences, Osaka University NAKAYA, Motoyuki

教室場面において、児童・生徒は学業的・社会的などのさまざまな目標をもち、それらが相互に関わりながら学習や対人関係に対して影響を及ぼしていると考えられる。本研究では、児童・生徒の多面的目標の質的検討および目標が学校適応に及ぼす影響について検討した。研究1では、小学4, 5, 6年生児童98名に対して半構造化面接による目標の調査を行い、また中学1, 2, 3年生202名に対して自由記述による調査を行い、目標の内容を検討した。その結果、学年が上がるに従い、目標がより多様になることが示唆された。研究2では、児童の多面的目標が学校適応の諸側面（友人・学習・クラス・学校）に及ぼす影響に関する質問紙調査を行った。その結果、向社会的目標が友人適応に、学業熟達目標が学習適応に積極的な影響を及ぼしていることが明らかにされた。

【キー・ワード】 多面的目標, 学校適応, 発達の变化

The purpose of this study was to examine the effects of children's multiple goals on school adjustment. In the first study, qualitative examinations of children's multiple goals were administered. Ninety-eight elementary school children were interviewed by group about what they were trying to achieve. And 206 junior high school students were answered the descriptive questions about their goals at school. As a result, it was suggested that children's goals at school were more diversified with the grade. In study 2, quantitative measures were used. One hundred and seventeen 6th graders answered to the multiple goals scale (six subscales: normative, prosocial, intimacy, assertive, academic-mastery, academic-performance) and school adjustment scale (four subscales: peer, self, learning, school). Multiple regression analysis revealed that children's prosocial goal and academic-mastery goal were positively related to school adjustment. The importance of multiple goals in school adjustment process was discussed.

【Key words】 Multiple goals, School adjustment, Developmental change

問 題

近年、学力の国際比較調査の結果などから、わが国の子どもたちの学力の低下が問題視されてきた（例えば市川，2003）。例えば最近では、2006年のOECD生徒の学習到達度調査（PISA）の結果、国

際比較においてわが国の生徒の学力の順位の低下が見られており、児童・生徒の学力が低下を続けていることが指摘されている。このような学力低下の問題を考える際に重要なことは、結果として表れている学力の低下だけが問題なのではなく、それを支える子どもの意欲にも変化が生じているという点であろう。すなわち、子どもの動機づけの観点から、子どもの学力の問題を検討することが必要であると考えられる。

さて、動機づけ研究における近年の動向を概観すると、現在注目されている理論のひとつとして目標理論 (Goal Theory) が挙げられる (Elliott & Dweck, 1988)。目標理論とは、児童・生徒のもつ目標志向性から、学業やその他の場面での達成過程を明らかにしようとするものであり、これまで多くの知見が蓄積されている (上淵, 2004)。

しかし、これまでの目標研究の問題として、学習動機づけ (学業的目標) が中心的に扱われ、それ以外の領域の目標については検討されてこなかったという点が挙げられる (Urduan & Maehr, 1995 など)。児童・生徒のもつ動機づけは多様であり (Ford, 1992; Wentzel, 2002b)、またわが国では役割期待や社会的規範が学習への動機づけにおいて重要な機能を果たすことが示唆されることから (例えば 東, 1994; 伊藤, 2004 など)、児童・生徒のよりよい動機づけの理解および促進を考えるためには、社会的領域も含む多様な視点からとらえることが重要である (Patrick, Anderman, & Ryan, A, 2002)。

このような問題意識から、近年、従来の学業領域を中心とした達成動機づけ研究に対して、社会的領域を含む多面的動機づけの重要性が指摘されてきた (例えば Urduan & Maehr, 1995; Ryan, A. & Shim, 2006)。それらの視点は、達成目標研究に対して社会的目標研究あるいは多面的目標研究と呼ばれる (中谷, 2007)。

ただしこれらの研究は緒についたばかりであり、多くの課題も残されている (中谷, 2007)。例えばこれまでの研究では、多面的目標の発達に焦点を当てた例はほとんどみられない。学校場面における児童・生徒の動機づけはきわめて多様であり、それらが発達段階によって変化することは十分考えられる。特にわが国では、多面的目標の内容に関して焦点を当てた研究もほとんどなく、多面的目標の内容に関する質的な検討を行うこと、そして児童・生徒の多面的目標の発達の变化について明らかにすることが必要だろう。児童・生徒の多面的目標の発達に焦点を当てることは、児童期および青年期前期において、学業的および社会的な動機づけがどのように発達するのかに関する示唆を与えるものとなるであろう。加えて、発達段階における動機づけ促進のための教育的示唆を検討する上でも意義があると考えられる。

また、多面的目標が学校適応に影響を及ぼす過程についても、これまで十分に明らかにされてきたとはいえない (Wentzel, 2002 など)。児童・生徒の多面的目標は、クラス内の人間関係や対人的相互作用を媒介して学校適応の諸側面に重要な影響を及ぼしていることが考えられる。

そこで本研究では、近年注目されている多面的目標研究の観点に立ち、以下の2点を明らかにすることを目的とする。第一に、半構造化面接および自由記述調査によって、児童・生徒における多面的動機づけ (多面的目標) に関する質的な検討を行うこと、そして第二に、児童の多面的目標を測定する尺度を開発し、目標が学校適応の諸側面にどのような影響を及ぼしているかについて明らかにするこ

とである。

研究1 児童・生徒の多面的目標に関する質的検討

目 的

これまでの目標研究ではほとんど検討されてこなかった、児童・生徒の多面的目標に関する質的検討を行うことを目的とする。児童・生徒への半構造化面接および自由記述質問紙を実施し検討することにより、従来の概念に限定されない幅広い目標志向性を明らかにすることが可能になると考えられる。

方 法

対象および調査時期

1. 小学生

対象 大阪府茨木市内の公立A小学校4, 5, 6年生各1クラスの児童であり、それぞれの人数は4年生39名, 5年生30名, 6年生29名の計98名(男子53名, 女子45名)であった。

手続き 1グループ3~5名単位での半構造化面接を行った。面接時間は1グループにつき10~15分程度であり、面接者と記録者の2名が担当した。記録者は、面接の進行に応じて、学校生活の様子が描かれたイラストを適宜示し、得られた回答を卓上ホワイトボードに板書するなどして、回答を促す役割も担っていた。なお、インタビューの音声は全てICレコーダによって録音された。

なお面接者は、筆者のほか、教育心理学専攻の大学院生1名と学部3年生4名であり、3年生は全員3ヶ月程度定期的に授業において学習支援活動を行うなどして、児童たちとのラポールを形成しており、児童への面接の訓練を受けていた。

調査は2006年12月に実施された。

2. 中学生^{注)}

対象 愛知県名古屋市内の公立中学校1~3年生各2クラスの生徒であり、それぞれの人数は1年生59名, 2年生75名, 3年生72名の計206名(男子92名, 女子111名, 不明3名)であった。

手続き 質問紙による調査を行った。『学校生活の中で、「こうなろう」と努力していることを書いてください』という質問への自由記述回答を求めた。調査は、各担任教師により、授業時間の一部を利用しクラス単位で行われた。

注) 本調査のデータは、1999年2月に実施した調査に基づき分析したものである。

結果と考察

1. 小学校高学年における多面的目標の検討

1-1 分析方法

まず音声データ全ての文字起こしを行い、そのなかから学校における児童の目標に関する内容の回答を選択した。次にその回答を1つずつカード化し、KJ法によって分類した上で、カテゴリーを構成した。

その上で、カテゴリーの客観性・妥当性を高めるため、大学院生1名が目標内容とカテゴリーの適切さについて評価を行った。疑問のある点については適宜協議し、カテゴリーの整理と修正が行われた。最後に、筆者が再度カテゴリー内容を検討し、Ford (1992) や Wentzel (1989) などを参考にしながら、目標内容として適切な概念となるよう適宜整理した。なお目標内容となった回答総数は147件(4年生43件, 5年生51件, 6年生53件)であった。

1-2 目標カテゴリーの構成

上述のような分析の結果、児童の目標内容は向社会、親密、規範、主張、傾聴、学業、の6つの目標に分類できることが見出された。

向社会的目標とは、「相手を思いやる気持ちをもつ」「困っている友だちがいたら手助けする」などであり、他者に対する援助や共感に関わる意識を表すものであった。次に親密目標とは、「クラスの人に自分から話しかける」「友だちと仲良くする」などであり、他者との親しさや親密な関係に関する内容のものであった。規範的目標とは、「授業中、先生の話をよく聞く」「先生や友だちに会ったらあいさつする」などであり、教室における規範的行動や態度への志向性を示すものであった。主張目標とは、「班での話し合いでは自分の意見を言う」「授業中進んで手を挙げる」などであり、自身の意見を主張することに関する目標内容であった。傾聴目標とは、「班での話し合いでは他の人の意見をよく聞く」などであり、主にグループなどの話し合い場面での傾聴的態度に関するものであった。最後に学業的目標とは、「授業で出題された問題をよく理解する」「難しい問題でも最後まで考える」などであり、学習において主に熟達的志向を示すものであった。

これらの目標全体を、Dowson & McInerney (2003) や Patrick, Anderman, & Ryan, A. (2002) などを参考に、上位カテゴリーから分類してみると、向社会、親密、規範、主張、傾聴の5つを社会領域の目標として、また学業を学業領域の目標としてとらえることが可能であった。この観点からは、小学校高学年児童の多くの目標が社会的なものであることが示唆されるといえるだろう。

1-3 多面的目標の学年差

それぞれの目標の内容と回答件数および各学年全体における割合は、表1に示す通りである。また各学年における多面的目標それぞれの割合を算出したものを図1に示した。4, 5, 6年生ともに、他の目標に比べ規範的目標がもっとも高い。特に5年生では、回答の76.5%が規範的目標に分類されるという結果となった。小学校において、教師は個々の教科指導だけではなく、学級における態度や生活全般に渡る指導が重要視されていることがうかがわれる。特に協力校の5年生のクラスでは、2学期に一部児童の行動などで学級経営上の問題が生じたことなどがあり、担任教師が児童に対する生

活指導をより重視している可能性がある。面接時の児童の発言においても、「教師に言われるためそのこと（目標）に努力する」との回答が多くあり，教師の日常的な指導が児童の目標形成に影響していることが考えられる。

また全体として，社会面，学業面の両面に渡る，教室における児童の多様な目標を反映した内容になったと考えられる。

表 1 小学校高学年生における多面的目標の内容的検討

目標／学年	回数				割合		
	4年生	5年生	6年生	合計	4年生	5年生	6年生
向社会	6	8	6	20	14.0	15.7	11.3
親密	11	0	10	21	25.6	0.0	18.9
規範	15	39	26	80	34.9	76.5	49.1
主張	9	2	7	18	20.9	3.9	13.2
傾聴	1	1	2	4	2.3	2.0	3.8
学業	1	1	2	4	2.3	2.0	3.8
合計	43	51	53	147	100	100	100

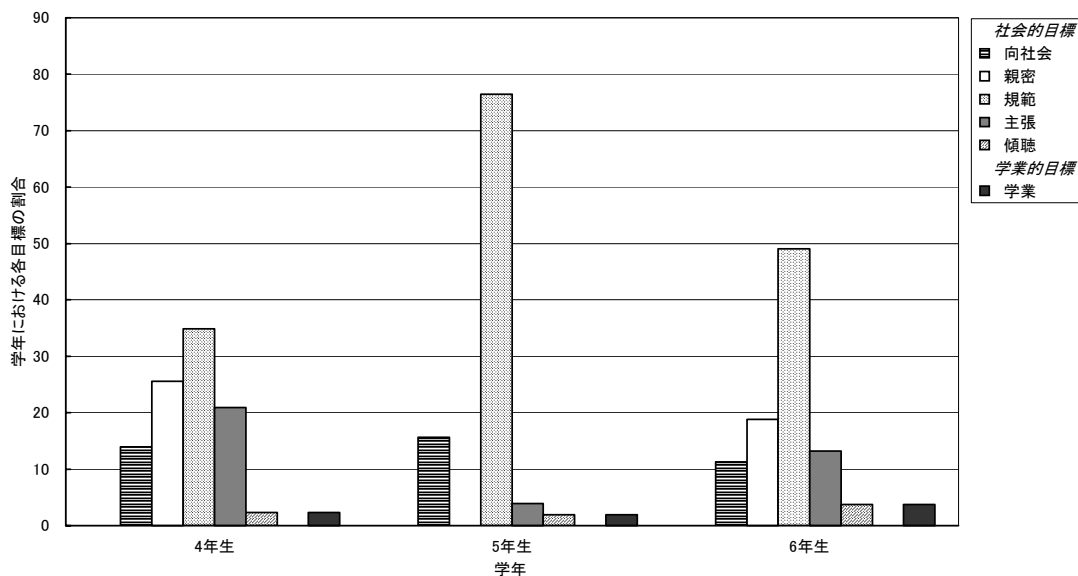


図 1 小学校高学年生における多面的目標

2. 中学生における多面的目標の検討

2-1 分析方法

まず、得られた回答のうち、目標内容として適切でないもの（例 単なる学校や教師への要望が書かれたものや、内容が不明瞭だったものなど）を除き、目標として適切であると判断された回答を1件ずつカード化した。次に、筆者と教育心理学専攻の大学院生2名によって、全てのカードを内容的な類似度に従ってKJ法によって分類した上で、カテゴリーを構成した。不一致があった場合には、その都度協議し、目標内容として適切な概念となるよう適宜整理した。

その上で、カテゴリーの客観性・妥当性を高めるため、大学院生1名が目標内容とカテゴリーの適切さについて評価を行った。疑問のある点については適宜協議し、カテゴリーの整理と修正が行われた。

最後に、筆者が再度カテゴリー内容を検討し、Ford (1992) やWentzel (1989)などを参考にしながら、目標内容として適切な概念となるよう適宜整理した。なお目標の回答総数は523件（1年生163件、2年生240件、3年生120件）であった。

2-2 目標カテゴリーの構成

中学生の目標内容とそれぞれの回答件数および各学年における割合を表2に示す。中学生の目標は、小学校高学年生に比べて多様であり、自己、社会、学習、運動・身体、その他の5つに分類され、そのうち自己および対人関係には複数の下位領域目標が存在することが示された。

自己に関する目標では、以下の5つの下位領域が見出された。まず『自己確立』には、「自立する」「責任感をもつ」などの回答が分類され、自分自身の自立や成長への志向性を示す内容から構成された。次に『積極性』では、「積極的になる」「すすんで物事に取り組む」などであり、学校での積極的な行動や態度への志向性を示すものであった。『達成』では、「自分で考え、実行する」「目標に向かってがんばる」などがあり、何からの対象に対して努力し成し遂げようとする志向性を示していた。さらに『平穏さ』は、「普通に生活する」などの回答であり、安定した平穏な学校生活への志向性を示す内容であった。最後に『楽しさ』では、「楽しく学校生活を送る」など、楽しさを求める志向が述べられる内容であった。

次に、社会的目標では、4つの領域が見出された。『向社会』では、「困っている人を助ける」「他者に思いやりをもつ」など、他者に対する援助や協力から構成されるものであった。『親密』では、「友だちをたくさん作る」「友だちと仲良くする」などであり、質的あるいは量的に、他者と親密な関係を構築することへの志向性を意味する内容であった。『規範』では、「忘れ物をしない」「きまりを守る」などの学校場面における規範を遵守することへの志向性を意味するものであった。『主張』では、「自分の意見をもつ」「正直にものをいう」などの回答が見られ、これらは主張的行動への志向性であると考えられた。

また、学習、運動・身体の2つの目標領域も見出された。学業目標では、「成績をよくする」「勉強をがんばる」などであり、学習自体やテストなどに対する努力志向を示す内容であった。運動・身体では、「部活をがんばる」「体力をつける」など、身体的な能力の向上を求める志向の回答が分類された。

これらの結果から、多面的目標のカテゴリーについて、中学生においては、小学校高学年生に比べて、より多様で詳細な目標が形成されている可能性が示された。特に自己に関する目標では、青年期前期における自己意識の発達を背景に、自己確立や積極性などの目標が、学年を上がるにつれて増加していることが見出された。

2-3 多面的目標の学年差

表2に見られるように、3学年のうち、目標の回答数をもっとも多い学年は2年生（240件）であり、次いで1年生（163件）、3年生（120件）であった。3年生に比べ、2年生では回答数が倍ほどであり、回答が特に多いことがわかる。

また各学年における多面的目標それぞれの割合を算出したものを図2に示す。目標内容では、各学年とも、社会的な目標が多く、その割合では、1年生で73.6%、2年生で54.2%、3年生で42.5%であり、学年とともに低下していくものの、一貫して全回答数のなかである程度高い割合を占めていた。2つの対人関係目標のうちでは、特に親密目標が向社会的目標に比べいずれの学年でも回答数、割合ともに倍以上と多かった。

また自己に関する目標では、1年生で8.6%、2年生で16.7%、3年生で14.2%と2年生以降がやや高い傾向がみられた。青年期前期においては、自分自身を内省したり、新たな自己像を模索する傾向があると考えられ、中学生では学年を上がる毎にそのような傾向が現れているものと考えられる。

さらに学業的目標では、1年生で5.5%、2年生で13.3%、3年生で21.7%と、学年とともに上昇する傾向がみられた。「勉強をがんばりたい」といった意識や態度は、受験などの背景も踏まえて高学年になるほど高まっている可能性が考えられる。

表2 中学生における多面的目標の内容的検討

目標	下位カテゴリ	回数				割合			
		中1	中2	中3	合計	中1	中2	中3	合計
自己	自己確立	0	11	9	20	0.0	4.6	7.5	3.8
	積極性	0	6	0	6	0.0	2.5	0.0	1.1
	達成	11	10	4	25	6.7	4.2	3.3	4.8
	平穏さ	0	4	2	6	0.0	1.7	1.7	1.1
	楽しさ	3	9	2	14	1.8	3.8	1.7	2.7
	自己合計	14	40	17	71	8.6	16.7	14.2	13.6
社会	向社会	25	26	7	58	15.3	10.8	5.8	11.1
	親密	65	66	26	157	39.9	27.5	21.7	30.0
	規範	26	35	16	77	16.0	14.6	13.3	14.7
	主張	4	3	2	9	2.5	1.3	1.7	1.7
	社会合計	120	130	51	301	73.6	54.2	42.5	57.6
学業	学業	9	32	26	67	5.5	13.3	21.7	12.8
	学業合計	9	32	26	67	5.5	13.3	21.7	12.8
運動・身体	運動・身体	10	18	4	32	6.1	7.5	3.3	6.1
	運動・身体合計	10	18	4	32	6.1	7.5	3.3	6.1
その他		10	20	22	52	6.1	8.3	18.3	9.9
	その他合計	10	20	22	52	6.1	8.3	18.3	9.9
合計		163	240	120	523	100	100	100	100

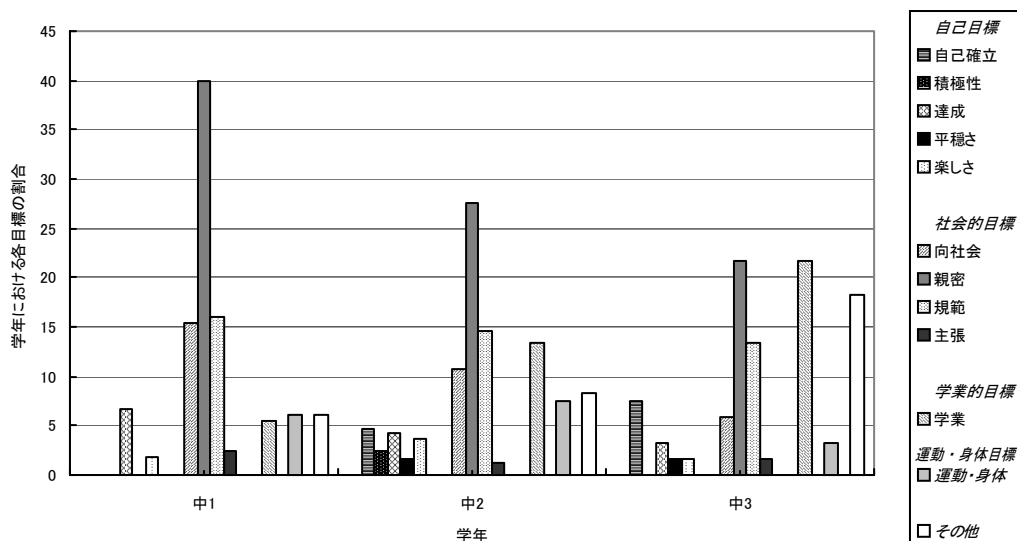


図2 中学生における多面的目標

研究2 児童における多面的目標が学校適応に及ぼす影響

目 的

児童の多面的目標が学校適応にどのような影響を及ぼしているかについて検討することを目的とする。研究1で見出された児童の多面的目標の内容を検討した上で、新たな児童用多面的目標尺度を開発し、学校適応の諸側面（学校・友だち・勉強・自己）に及ぼす影響を明らかにする。

方 法

対象 大阪府茨木市内の公立A小学校6年生3クラスの児童117名（男子58名，女子56名，不明3名）。

手続き 質問紙による調査を行った。調査は，筆者および教育心理学専攻の大学院生によって，授業時間の一部を利用しクラス単位で行われた。調査は2007年7月に実施された。

児童用多面的目標尺度 研究1に基づき，さらに中谷(2006), Ryan, A., Hicks, & Midgley, (1997), Wentzel (1991)などの目標概念を参考にして構成した。規範遵守目標，向社会的目標，学業熟達目標，学業遂行目標，親密目標，主張目標の6下位尺度，各2項目の計12項目であった。項目内容は表3を参照。

学級適応尺度 小学校高学年児童の適応を測定するために，三島(2006)などを参考に構成した。

学校（「学校に行くのが楽しい」「学校に行きたくないと思うことがある」の2項目）、友人（「困ったことがあったら友だちに相談したいと思う」「友だちから大切にされていると思う」「友だちと一緒にいるのは楽しい」の3項目）、学習（「学校で勉強するのは楽しい」「勉強には自信がある」の2項目）、自己（「自分のことが大好きだ」「自分はまわりから認められている人間だと思う」「自分は友だちを大事にしていると思う」の3項目）の4下位尺度、計10項目。

結果と考察

1. 尺度構成

はじめに、各尺度の項目平均と標準偏差を算出した。また内部一貫性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した。

多面的目標尺度では、親密目標において、 $\alpha = .29$ と低い値となり、他の5つの目標では $\alpha = .61 \sim .83$ と高い値が得られた。また学校適応尺度では、自己領域において $\alpha = .46$ であり、他の3つの領域では.58～.60と比較的高い値となった。

いくつかの尺度で信頼性係数が低くなった理由としては、項目数が2～3項目と少ないことに加え、項目内容がやや幅広い概念を測定していたことが考えられる。これらの尺度においては、十分に信頼性のある尺度とはいえないが、ここでは得られたデータに基づいて、問題点を考慮しつつ検討するものとする。

表3 児童の多面的目標尺度の各項目平均と標準偏差

項目	平均	SD	α
規範的目標	2.79	0.71	
授業中は、友だちとおしゃべりしなくてもがまんしようと思う	2.81	0.82	.62
そうじや給食のときにはしずかに取り組もうと思う	2.77	0.85	
向社会的目標	3.16	0.61	
友だちが何かに困っていたら手助けしてあげたいと思う	3.25	0.63	.66
勉強のわからない人がいたら、手助けしようと思う	3.08	0.78	
学業熟達目標	3.06	0.70	
勉強をして新しいことを知るのが好きだ	2.84	0.83	.72
むずかしい問題でも、何とか理解できるようにがんばろうと思う	3.28	0.75	
学業遂行目標	2.48	0.80	
勉強では他の人よりできたかどうかが一番気になる	2.40	0.93	.61
勉強をするのはよい成績をとりたいからだと思う	2.56	0.95	
親密目標	3.60	0.48	
友だちとは仲良くしようと思う	3.86	0.40	.29
クラスのみんなといろんな行事や活動をするのは楽しい	3.35	0.79	
主張目標	2.50	0.73	
クラスの話し合いでは自分から意見を言おうと思う	2.40	0.79	.83
授業のときには自分の意見を発表しようと思う	2.60	0.81	

2. 全変数間の相関

全変数間の相関係数を表 4 に示す。まず、多面的目標の下位尺度間の相関では、学業遂行目標を除き、他の尺度間では $r = .21 \sim .47$ と、中程度の正の相関が見られた。学業遂行目標では、学業熟達目標との関連を除いて有意な相関は見られないという結果となった。これは中谷 (1996) と同様の結果であり、学業遂行目標が他の目標からやや独立した性質をもつことが示唆される。

次に学校適応尺度では、全ての下位領域間で $r = .26 \sim .81$ と、高い関連がみられることが示された。学校における各領域の適応は、相互に正の関連をもっていることが示唆されたといえる。またクラス構造尺度では、 $r = .48 \sim .69$ と、全ての次元で中程度から高い相関が見られた。

表 4 全変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	Mean	SD	α	N
多面的目標														
1 規範											2.79	0.71	.62	113
2 向社会	.25**										3.16	0.61	.66	113
3 学業熟達	.32***	.39***									3.06	0.70	.72	112
4 学業遂行	.13	.05	.28**								2.48	0.80	.61	113
5 親密	.24**	.41***	.47***	.09							3.60	0.48	.29	113
6 主張	.25***	.42***	.44***	.21*	.34***						2.50	0.73	.83	113
学校適応														
7 学校	.09	.16	.23*	-.02	.50***	.19*					3.18	0.80	.58	113
8 友人	.10	.52***	.08	-.13	.42***	.13	.37***				3.25	0.56	.60	109
9 学習	.30***	.33***	.55***	.18	.37***	.33***	.43***	.26**			2.80	0.73	.59	113
10 自己	.10	.32***	.26**	.05	.35***	.33***	.42**	.43***	.50***		2.81	0.56	.46	107
11 適応合計	.21*	.42***	.42***	.05	.58***	.37***	.81***	.64***	.77***	.77***	12.06	2.03	.78	103

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3. 児童の多面的目標が学校適応に及ぼす影響

児童の多面的目標が学校適応に及ぼす影響について、重回帰分析を用いて検討した。その結果を表 5 に示す。まず向社会的目標の追求は、学校適応における友人との関わりに積極的な影響を及ぼしていた ($\beta = .39, p < .001$)。他者への思いやりや援助の志向性は、友人との関係の良好さに影響を与えている可能性が考えられる。

また学業熟達目標は、学習への適応と関連していることが示された ($\beta = .27, p < .05$)。児童が学習における好奇心や耐性などの熟達志向をもつことは、勉強の楽しさや自信をもつことを促しているものと考えられる。

さらに、親密目標からは学校 ($\beta = .34, p < .01$)、友人 ($\beta = .23, p < .05$)、および全体 ($\beta = .30, p < .01$) への適応に対して積極的な影響が認められた。クラスの友人との良好な関係への志向は、友人への適応だけでなく、学校や適応得点全体とも積極的な関連をもつ可能性が示された。

なお、規範的目標、学業遂行目標、および主張目標では、学校適応の諸側面に及ぼす有意な影響は認められなかった。これらの目標では、学校適応と直接関わる可能性は低いものと考えられる。

表5 児童の多面的目標が学校適応に及ぼす影響

	学校適応				
	学校	友人	学習	自己	全体
多面的目標					
規範	-.07	-.02	.09	-.02	.00
向社会	-.15	.39 ***	.11	.09	.08
学業熟達	.05	-.12	.36 ***	.05	.12
学業遂行	-.07	-.12	.02	-.01	-.06
親密	.34 **	.23 *	.14	.18	.30 **
主張	.03	-.07	-.01	.22	.08
R^2	.34 ***	.39 ***	.43 ***	.24 **	.49 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

総合的考察

本研究では、児童・生徒の多面的目標の発達の变化に関する質的検討、および児童の多面的目標が学校適応に及ぼす影響について検討を行った。研究1において、児童・生徒の多面的目標の質的検討を行った結果、小学校高学年の児童では、規範や向社会、親密、あるいは学業熟達といった、社会的および学業的な複数の目標が見出された。一方中学生では、自己、対人関係、規範、学習、運動・身体に渡る目標領域に加え、自己および対人関係では、複数の下位目標が見られ、目標がより多様なものになっている可能性が示された。これまで児童・生徒の目標に関する質的研究はDowson & McInerney (2003) などのみであり、そこにおいても目標の発達の变化に関する示唆はほとんどない。本研究の結果は、学校における多面的目標が、発達段階あるいは学校段階によって変化し、より多様化してゆくことを示すものであり、有意義な知見であると思われる。

また研究2においては、児童の多面的目標が学校適応に及ぼす影響について検討し、向社会的目標が友人との適応に、学業熟達目標が学習への適応に、また親密目標が学校および友人への適応に影響を及ぼしていることが示された。Anderman (1999) は、児童の社会的目標（関係目標および責任目標）が学校へのポジティブ・ネガティブな感情に影響している可能性を指摘しているが、本研究の結果は、児童の多面的目標が友人や学習、学校という学校適応のより幅広い側面に影響を及ぼしていることを示唆するものである。さまざまな側面をもつ学校への適応には、単に児童の学業的目標だけではなく、向社会的あるいは親密目標といった、より幅広い目標を促進することの重要性が指摘できるだろう。

今後の課題

本研究では、研究1において、小学校高学年および中学生における多面的目標の質的検討を行い、学年が上がるに従って、児童・生徒のもつ目標はより多様な内容へと変化することが示唆された。しかしこの結果は、半構造化面接と自由記述調査という方法論上の問題である可能性も考えられるため、統一した手続きによる検討が求められるであろう。加えて中学生のデータ収集の時期の問題もあると

考えられる。

また研究2では、質問紙調査を用いて、児童の多面的目標と学級適応の各側面の関連について検討し、友人への適応には向社会的目標と親密目標が、学習への適応では学業熟達目標が、そして学校への適応には親密目標が影響していることが示された。しかし親密目標の信頼性が低く問題があること、また他の目標においても信頼性は認められるが項目数が十分ではなく課題が残ることが考えられる。今後の研究では、尺度項目を確保した上で、さらなる検討を行うことが望まれる。

引用文献

- Anderman, L. H. (1999). Classroom goal orientation, school belonging and social goals as predictors of students' positive and negative affect following the transition to middle school. *Journal of Research and Development in Education*, **32**, 89-103.
- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育 発達の日米比較にもとづいて シリーズ人間の発達 12. 東京大学出版会.
- Dowson, M. & McInerney, D. M. (2003). What do students say about their motivational goals?: Towards a more complex and dynamic perspective on student motivation. *Contemporary Educational Psychology*, **28**, 91-113.
- Elliott, E. S. & Dweck, C. S. (1988). Goals: An approach to motivation and achievement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 5-12.
- Ford, M. E. (1992). *Motivating Humans: goals, emotions, and personal agency beliefs*. CA: Sage Publications, Inc.
- 市川伸一. (2004). 学ぶ意欲とスキルを育てる. 小学館.
- 伊藤忠弘. (2004). 自己と動機づけ. 上淵寿 (編著) *動機づけ研究の最前線* (pp.61-86), 北大路書房.
- 三島浩路. (2006). 階層型学級適応感尺度の作成 小学校高学年用. *カウンセリング研究*, **39**, 81-90.
- 中谷素之. (2006). *社会的責任目標と学業達成過程*, 風間書房.
- 中谷素之. (2007). *学ぶ意欲を育む人間関係づくり*. 金子書房.
- Patrick, H., Anderman, L. H., & Ryan, A. M. (2002). Social motivation and the classroom social environment. Midgley, Carol (Ed.), *Goals, goal structures, and patterns of adaptive learning*. (pp. 85-108). NJ: Lawrence Erlbaum.
- Ryan, A. M., Hicks, L. & Midgley, C. (1997). Social goals, academic goals, and avoiding seeking help in the classroom. *Journal of Early Adolescence*, **17**, 152-171.
- Ryan, A. M. & Shim, S. (2006). Social Achievement Goals: The nature and consequences of different orientations toward social competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 1246-1263.
- 上淵寿. (2004). *動機づけ研究の最前線*, 北大路書房.

- Urduan, T. C. & Maehr, M. L. (1995). Beyond a two-goal theory of motivation and achievement: A case for social goals. *Review of Educational Research*, **65**, 213-243.
- Wentzel, K. R. (1989). Adolescent classroom goals, standard for performance, and academic achievement: An interactionist perspective. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 131-142.
- Wentzel, K. R. (1991). Social competence at school: Relation between social responsibility and academic achievement. *Review of Educational Research*, **61**, 1-24.
- Wentzel, K. R. (2002). The contribution of social goal setting to children's school adjustment. In A. Wigfield & J. Eccles (Eds.), *Development of Achievement Motivation*, (pp. 221-246). CA: Academic Press.

